

パリ通信 5月号(113)

フランスのワクチン接種

今日(5月13日)は「キリストの昇天祭」祝日である。復活祭から40日目、復活したキリストは地上の弟子たちに最後の別れを告げて天に昇る。今後地上で目に見える姿で現れることはないが、十日後に聖霊として再来することを告知する。今年は5月13日が「昇天祭」にあたり、フランスでは四日間の連休である。

夏の長期バカンスを前に、「昇天祭」は例年緑が美しい季節で、今年は特別に嬉しい休みになった。今年2月から始まった集団ワクチン接種の効果がようやく見え始めてきた。今日の新規感染者数(21500)、集中治療ベッドを必要とする重症患者数は4583名。数字は依然として多いが、ようやく減少傾向にある。

現時点で1800万人(フランス成人人口の3分の1)が1回目のワクチン接種を終えている。今週からは年齢、職業、既往症の有無を問わず18歳以上のワクチン接種希望者には当日予約が可能となった。6月15日からは何の条件もなく、成人希望者は誰でも接種可能になる。私自身、第1回目ファイザー製ワクチンを4月末に打って、6月4日2回目の接種を待っている。血栓などの副反応報道に不安もあったが、二日ほど腕が痛く、三日ほど倦怠感が続いただけで案ずるより産むが易しだった。何よりも外出のストレスから開放されるのは予想外に安心感がある。

フランスはロックダウンが長く続き、夜間外出禁止も未だ続行している。人に会う機会も極端に減少し、マスクに手洗いを欠かせない。知らず知らずのうちに人に会う恐怖心が溜まっていたが、ワクチン接種のお陰で人に移さない、移されない、罹ったとしても重症化しないことで気持ちが軽くなった。

5月3日自宅から10km以内の移動制限が解除されて初の連休となった「昇天祭」。海外は難しいとしても国内を自由に移動できる喜び、開放感を皆が味わっている。久しぶりに家族に会いに行く人、海や山で新鮮な空気を満喫する人、連休初日は2年前の夏以来の高速道路渋滞となった。カフェ、レストランは未だ閉まっているがサンドイッチやテイクアウトのお弁当で外に出る幸せを大いに満たしている。

ワクチン接種と段階的な規制緩和で6月30日にはコロナ禍の出口に到達できる見込みだという。もちろんこれでコロナ禍が終わる訳ではないが、ようやく前向きに生活できる期待感が明るい気持ちにしてくれる。

フランスはコロナワクチンの数も足りているようで、種類も多い。ファイザー製、モデルナ製、アストラゼネカ製、ジョンソン&ジョンソン製と4種類から選ぶことができる。それぞれに接種回数と接種の間隔は異なるが、大きな違いはアストラゼネカとジョンソン&ジョンソンは不活化ウイルスから作る従来のワクチンであるのに対して、ファイザーとモデルナは「ARN messenger」(伝令リボ核酸)による新しいワクチンであることだ。従来一つのワクチンを開発するには最低10年が必要と言われ、開発費も巨額で、今回のコロナワクチンが1年で開発されたことは驚異と言わざるを得ない。人類を救うという急務が10年を1年で可能にした訳だが、そこにはやはりフランス「パストゥール研究所」の存在があった。

パリのパストゥール研究所では1950年代からDNA研究が進み、1961年3人の研究者チームが遺伝子コード「伝令リボ核酸」(メッセンジャーリボ核酸)の存在を発見していた。フランソワ・グロ、フランソワ・ジャコブ、ジャック・モノーの3人である。モノー(Jacques Monod, 1910-1976)はジャコブとともに1965年ノーベル生理学・医学賞を受賞し、1971年から1976年パストゥール研究所所長を務めた人である。1970年『偶然と必然』(Le hasard et la nécessité)を出版し、哲学的な世界観を発表した。実際に「伝令リボ核酸」ワクチンを開発した。

実用化に成功したのは彼らの次世代、ハンガリーからアメリカに亡命した女性研究者カタリン・カリコ(65歳)らであるが、こうした研究者たちおかげで普通の生活が戻ることに感謝したい。

曇り空のパリに残った住人たちも、近くの公園や川岸をゆっくり散歩し、先が見えてきた開放感を楽しんでいるようだ。



(上記写真と下記註は小原靖夫が編集したもの。下記はウキペディアからの引用編集)

ジャック・リュシアン・モノー(1910~1976)は、フランスの生物学者。フランソワ・ジャコブとともにオペロン説を提出し、これによって1965年度ノーベル生理学医学賞を受賞した。動物学を学んで1931年にパリ大学を卒業し、その後原生動物やショウジョウバエ遺伝学の研究を行った。さらにアンドレ・ルヴォフ(のちにノーベル賞共同受賞)の指導を受けて大腸菌の代謝調節に関する研究を行った。第二次世界大戦中にはレジスタンス運動に参加した。1959年パリ大学に招聘され、1971年にはパストゥール研究所所長に任命された。戦後も大腸菌の研究を継続し、これによって1950年代から60年代にかけ、mRNAを介した遺伝情報の発現や、フィードバックによる遺伝子の調節を説明するオペロン説など、すべての生物に共通する分子遺伝学の基礎的概念を確立した。

科学哲学にも関心が深く、特に著書『偶然と必然(Le Hasard et la Nécessité)』(1970年)では現代生物学に基づく自らの世界観を示した。